

二 印度古代派

分 析

上述の點は凡て頗る好結果を得たと思ふのであつて、昔の彫刻家が美術上に示してゐる四象徴の眞意義を、確かに讀み得たのである。既に、塔は涅槃を、輪は轉法輪を、菩提樹は成道を意味し、更に蓮花は降誕を示すべきである事をも知つたが、之には、單複があり、摩耶夫人を伴ふものや伴はないものもあつて、之に龍象のあるのも無いものもあつた。之と共に、降誕といひ成道といひ、説法にしても入滅にしても、何れも主を現はしてゐない極めて不思議な結構である爲に始めは驚いたのであるが、こゝに於て、古代派の作品を續いて分析してその發達を辿り得るまでになつたのである。何となれば、流派の後の發達は、その初期のもの、論理的連續に外ならず、假令他を欲しても前からの方法を全然覆して了はない以上、不可能事であつたからである。然し、傳記中の主要人物が傳承的に現はされないでゐる事が、印度の古代